

研究論文

19世紀末、中国における民衆への言語教育観の変化 —『万国公報』誌上の盧愷章の論説と梁啓超への影響を中心に—

赤 桐 敦

キーワード：言語教育政策史、中国語教育史、文字改革、盧愷章、梁啓超

要 旨

19世紀末、中国において民衆への言語教育が訴えられ、「新字」や「切音字」と呼ばれる表音文字案が多数考案された。本稿は、プロテスタント宣教師の漢字雑誌『万国公報』に1895年掲載された盧愷章の論説、及び1895-98年に公表・出版された言語教育に関する文献史料を精査し、盧の提示した民衆への言語教育を行うべき、との新たな言語教育観が、梁啓超らの改革派知識人に影響を与え、広く共有された過程を明らかにする。盧はその着想を、福建省廈門のプロテスタント宣教師から得ていた。宣教師の関心はいかに言語教育を実施するかにあったのに対し、中国の知識人は文と文を構成する文字の改革を重要視した。そのため、民衆への言語教育が重要であるとの考えが広がる過程で「新字」を巡る論争が生じ、清朝崩壊までに32種類の表音文字案が生み出され、その後も「文字改革」が中国の言語教育政策の中心を占めることとなった。

1. はじめに

本稿は、19世紀末、民衆への言語教育を行うべき、との言説が初めて中国の知識人に共有された経緯を検討し、近代中国の言語政策を生み出すこととなる言語教育観の変化を考察する。

近代以前の伝統的な中国の世界観において、民衆は皇帝の財産に過ぎなかったため、全ての民衆に言語教育を行う、との考えは広く共有されていなかった。科挙を目的とする言語教育は僻村にまで広く普及していたが、その対象は聡明な子どもに限られており、文語¹を学ぶ難しさはむしろ知識人の地位を高めることに寄与していた。民衆への言語

教育観が変化し、民衆を国家の構成員として言語教育の対象とみなすことにより、文語の難しさを取り除くことが意識され、その結果、言文一致、表記法の簡略化、口語の標準化に向けて中国語の近代化が開始されることとなった。

本来、中国語は、「切音」と呼ばれる漢字の正しい読み方を示すための方法があるだけで、教育用の読み仮名に相当する表音文字を持たなかった²。そのため、子どもは数万に及ぶ「文」とそれを構成する「字」を丸暗記する学習方法を持つのみだった。文字を音声と合わせ暗誦する学習は、言語学習だけで十数年の時間を要し、多くの民衆が読み書きのできない原因となっていた³。中国語が学びやすくなれば、言語学習にかける子どもの時間と労力が大幅に軽減され、教科教育が実施できるようになる。また民衆の子どもが初等教育を受ければ、その後に中等教育や高等教育で専門教育を受け、科学技術で中国の近代化に貢献することが期待できる。中国語の近代化によって、初めて中国は近代国家として富国強兵を目指すことが可能となるのである。

従来の史的研究は、中国語の近代化は日清戦争（1894-95）を契機に、愛国心に目覚め朝廷の改革を目指す梁啓超（1873-1929）らの知識人によって開始され、その後数十年を経て段階的に発達してきた、との見方を強調してきた（黎 1934：93、倪 1959：13）。しかし、史料を精査すると通説とは異なり、廈門のプロテスタント宣教師（以下、宣教師）⁴の言語教育に影響を受けた盧憲章（1854-1928）という人物が、上海の宣教師の発行する雑誌『万国公報』（1868-1907）上で民衆への言語教育を訴え、梁が『時務報』（1896-98）上でこれを模倣したため、改革派の知識人の間で広く共有されたことが明らかとなる。宣教師の関心は、民衆へ言語教育を実施することによって、聖書の言葉を通じた精神的な救済と近代的教養による物質的な救済を実現することであり、そのために中国の文字について議論した。中国の知識人の間で言説が再生産される過程で、この問題は伝統的な「言」と「文」の二項対立で理解され、誰が新たな表音文字である「新字」を作成するのか、との文字案を中心とする論争へと変化していった。この文字を巡る論争は、統一的な表記法に収斂することなく、民国期を経て、1950年代の「文字改革」運動まで続く。文字改革によって近代化を成し遂げようとする近代中国の言語教育思想は、この『万国公報』誌上の議論に遡ることができる。本稿は、宣教師の言語教育と知識人の文字改革論争とのつながりを解明することにより、従来の史的研究とは異なる言語教育史観を提示することを目指す。

以下では、まず基本史料について検討した後、前史として、アヘン戦争後に来華した宣教師の言語教育と盧のつながりを明らかにし、次に1895年に『万国公報』誌上に掲載された盧の論説に見られる民衆への言語教育観を分析する。続いて、蔡錫勇（1847-

97) や梁らの1895-98年に『万国公報』内外で再生産された言説から知識人の言語教育に対する認識を解明するとともに、改革派の知識人と宣教師の関係を探究する。最後に、中国の言語教育観の変化がその後の中国の近代化に与えた影響を究明する。

2. 基本史料と先行研究

本稿は、『万国公報』及び文字案に付随する序文など言語教育に関する言説を基本史料とする。表1は、本稿で検討する基本史料を通時的に配置したものである。日清戦争から戊戌の変法(1898)にかけての史料は、(1) 著者自身が自説の優位性を主張するために、出版時期を装ったり、後で文章を改変したりした、(2) 史的研究において研究者が史実の誤認や恣意的な解釈を行った、などの理由から、言説の執筆時期を正確に把握することは困難である⁵。そこで本稿では、客観的に公表・出版が確認される時期順に言説を配置した。

『万国公報』と『時務報』は定期刊行物であるため、公表時期について最も信頼できる史料である。また、蔡錫勇の『伝音快字』も出版直後に、梁啓超と蔡爾康(1851-1921)が内容に言及しており、公表時期が信頼できる。沈学(1871-1900)の『盛世元音』については、『時務報』に序文が掲載されたが、出版された本を見たとの証言はみあらず、1950年代の『拼音文字史料叢書』の編纂の際にも発見されていない。力捷三(生没年不詳)の『閩腔快字』は、蔡の『伝音快字』を継承したものであり、1896年の9月以降に刊行されたと考えられる。王炳耀の『拼音字譜』は、自序で、「光緒22年仲秋」(1896年旧暦8月)と記しているが、「拼音字譜序」という推薦文では、翌年の光緒23年になっているため、現存する刊本の出版は、1897年以降と考えられる。1892年に廈門で出版されたとされる盧の『一目了然初階』は、出版当時の第三者の記録がなく、現存する刊本がどこまで遡れるのかは不明である。

先行研究については、宣教師の言語を巡る議論に関してDe Francis(1950)、蒲(2004、2009)、ラマル(2005)の研究に依拠し、『万国公報』誌上の言語教育に関する議論については王爾敏(1982)と黄温良(2005)の研究を参考にした。盧の事跡に関しては、許長安(2000)によった。廈門大学の言語学者の許氏は、盧の事跡を体系的に調査しており、筆者が現地調査を行った際に、廈門に残る史料や盧の足跡について、懇切な助言をいただいた。先行研究の問題点は、研究の枠組みを、黎(1934)の国語運動史の研究や、これを引き継いだ倪(1959)の文字改革運動の史的研究に依拠し、宣教師、盧憲章、梁啓超らの言語教育観の形成を個別にとらえたため、宣教師と盧憲章の影響を限定的に

第1表 言語教育に関する言説一覧

西暦	月	書名・論説題目	著者	初出媒体	本稿の引用文献
1892	6	『一目了然初階』	盧愷章	廈門にて出版	拼音文字史料叢書 (1956) 『一目了然初階』
1895	7	「変通推原説」	盧愷章	『万国公報』第七十八冊	華文書局影印本 (1968: 15341)
	10	「変通推原第二章」	盧愷章	『万国公報』第八十一冊	華文書局影印本 (1968: 15539)
	11	「三統変通推原説」	盧愷章	『万国公報』第八十二冊	華文書局影印本 (1968: 15607)
1896	1	「同邑盧君切音字書後」	蘇易	『万国公報』第八十四冊	華文書局影印本 (1968: 15752)
	2	「四読変通推原説」	盧愷章	『万国公報』第八十五冊	華文書局影印本 (1968: 15811)
	8	『伝音快字』	蔡錫勇	武昌にて出版	拼音文字史料叢書 (1956) 『伝音快字』
	9	「沈氏音書序」	梁啓超	『時務報』第四冊	中華書局影印本 (1991: 209)
	9	「盛世元音原序」	沈学	『時務報』第四冊	中華書局影印本 (1991: 212)
	10	「中国切音新字説」	盧愷章	『万国公報』第九十三冊	華文書局影印本 (1968: 16355)
	?	『閩腔快字』	力捷三	武昌にて出版	拼音文字史料叢書 (1956) 『閩腔快字』
1897	1	「書盧愷章先生中国切音新字後」	林榕存	『万国公報』第九十六冊	華文書局影印本 (1968: 16588)
	3	「節録致盧愷章先生第三函」	沈学	『万国公報』第九十八冊	華文書局影印本 (1968: 16748)
	4	「書伝音快字後」	蔡爾康	『万国公報』第九十九冊	華文書局影印本 (1968: 16837)
	5	『拼音字譜』	王炳耀	香港にて出版	拼音文字史料叢書 (1956) 『拼音字譜』
	5	「致沈学先生函」	林榕存	『万国公報』第一百冊	華文書局影印本 (1968: 16907)
	?	『六齋卑議』	宋恕	上海にて出版	敬郷楼叢書 (1928) 『六齋卑議』
1898	9	「奏請用切音」	林榕存	皇帝への上奏文	拼音文字史料叢書 (1956) 『閩腔快字』に収録

とらえていることである。また史料としての『万国公報』上の議論も重視していない⁶。
なお、以下の引用の日本語訳は筆者による。

3. 民衆への言語教育観の導入と再生産

3.1 前史

3.1.1. 廈門の宣教師による言語教育

19世紀初頭から、London Missionary Societyの宣教師Robert Morrison (1782-1834)による布教のための中国語研究が進められていたが、清朝が宣教師の活動を禁じていたため、その活動は、中国本土には及ばなかった。その後、アヘン戦争(1840-1842)後に開港された広州、廈門、福州、寧波、上海で布教が本格的に始められると、1850年代から、中国の諸言語をローマ字化しようとする試みが本格化する(蒲2009:9)。宣教師は、民衆が文字を学び、本を読めるようになれば、聖書を読んで精神的に救済されるだけでなく、西洋の教養を学んで物質的にも豊かになることができると考え、教会に教会学校を設置した。教会では、子どもだけでなく、日曜日に礼拝に訪れる民衆にも教育が行われたが、その際、庶民には漢字が普及していなかったために、教育用の文字としてローマ字が使用された。

1850年代の廈門では、宣教師自身が現地語を学ぶために、現地語の表記法、辞書の編纂などを通じて廈門語の研究を進めていたが、やがてそれを応用して中国人に対する言語教育が行われるようになった。The Reformed Church in Americaの宣教師John Van Nest Talmage (1819-92)が、1852年ローマ字による廈門語の綴り方の入門書『*Tng-oē Hoan-jī Chho-hák* (唐話番字初学)』を出版したのを皮切りに、『*Tian Lo Lèk thèng* (天路歷程)』(1853)、『*Lo-tek ê chheh* (路得記)』(1853)、『*Ióng Sim Sin Si* (養心神詩)』(1859)などが次々と出版された(De Jong1992:39)。民衆への教育に用いられた表記法は、話し言葉をそのままローマ字で綴ったもので、後に「白話字」、「教会ローマ字」と呼ばれるようになる。

教会ローマ字は、学びやすく、すぐに読み書きができるようになるため、後に廈門を中心に民衆に広まった。廈門の中国人宣教師の陳以平によれば、教会ローマ字を使用すれば、全く字を知らない者でも、1か月から3か月で読み書きできるようになり、半年で自在に文字を操り、聖書を熟読することができたという(陳2008:2)。福建からの移民の多い台湾では、The Presbyterian Church of Englandの宣教師Thomas Barclay (1849-1935)によって、教会ローマ字新聞『台湾教会公報』(1885-)が発行され、現在まで続いている。

3.1.2. 盧戇章と『万国公報』

19世紀中葉から末まで、各地域の宣教師は統一的な見解を持っていたわけではないが、各会派の集う全国会議で意見を交わしながら、言語教育の実践を重ねていた（ラマルル2005：177-178）。一方、中国の知識人の間でも1860年代から、西洋の機械文明を学ぶことによって近代化を図ろうとする洋務派が現れるが、儒学的教養を基礎としたため、宣教師の言語教育に関心は払われず、両者が接点を持つことはなかった。

宣教師の言語教育が改革派の知識人に知られるようになったのは、1895年、廈門で宣教師の影響を受けた盧戇章が、上海の宣教師の発行する雑誌『万国公報』上で論説を發表し、民衆への言語教育の必要性を訴えたことによる。盧は、日清戦争の失敗を乗り越え、中国が富国強兵を目指すには、民衆への言語教育を通じて、全ての民衆が西洋文明を学ぶべきである、と主張した。また、中国の言語は、文字が複雑で文字数が多すぎ、庶民の話し言葉と大きく乖離しているため、西洋文明を学ぶのに不適當であるとの宣教師の言語教育観を紹介した。

盧は廈門近郊の同安県出身の地方の知識人で、科挙試験に失敗した後、廈門から来た宣教師の洗礼を受けてシンガポールに渡った（許2000：77）。中国の古典、英語とキリスト教に通じており、帰国後、London Missionary Societyの宣教師John Macgowan（?-1922）の*English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect*（1884）の編纂を手伝っていた（De Francis1950: 33）。そのため、教会ローマ字を用いる廈門の宣教師の言語教育に通暁していた。

しかし盧は、科挙試験の入門者にあたる文童に過ぎず、朝廷の知識人に意見を述べることなどできない身分であった。その言説は、『万国公報』に掲載されることによって、初めて改革派の知識人の目にとまる。『万国公報』は、1868年、当初布教のための『教会新聞（*The Church New*）』として、Young John Allen（1839-1907）ら上海の宣教師によって創刊された漢文雑誌で、日清戦争では「朝鮮紀乱」（後に「乱朝紀」に改題）など連載記事で戦況を克明に伝え、中国内外の戦争の時評を掲載していたので、キリスト教に興味を持たない中国の知識人にも広く読まれるようになっていた（鄭2001：170）。

宣教師の民衆への言語教育は、多少の広がりを持っていたものの、広大な中国では小さな点に過ぎず、南部の開港地から遠く離れた北京の知識人は知る由もなかった。一方、改革派の知識人も日清戦争の敗戦に強い危機感を抱きながらも、具体的な方策を見いだせずにはいた。日清戦争によって読者層を拡大した『万国公報』と、宣教師の言語政策を中国人の感覚で理解できる盧という人物の媒介によって、近代的な言語教育観が知識人に広く認識されることとなったのである。

3.2. 1895年『万国公報』上で提示された民衆への言語教育観

3.2.1. 1895年7月掲載「変通推原説」

盧の言説は、「変通推原説」(1895.7)、「変通推原第二章」(1895.10)、「三統変通推原説」(1895.11)の三回にわたって、『万国公報』に掲載された。

1895年7月『万国公報』に掲載された「変通推説」において、盧は、表音文字である「切音文字」を用いて国中の全ての人々に読書をさせ、「精」にさせるべきだと訴える。精とは実用的な知識を意味し、大まかでいい加減であることを意味する「苟」と対立する概念である。盧にとって、儒者の教えは苟であり、無用のものに過ぎなかった。

国が振興するのは、精であるからであり、振興しないのは苟だからである。精とは、細微であることである。〔中略〕苟の者は、これを浅はかだと言う。私たち儒者はこんなことを求めてはいない。深遠な太古のことを研究しているのだと。苟の者は、日常のあたりまえのことでも、口を開けばいにしへの聖人や王を引き合いに出す。(盧1895.7:15341)

人はただ成長するだけでは「精」にはなれない、と盧は主張する。そのためには「理」を知り、その理を「六合」(天地東西南北)に広げなければならない。理は、小さくは家庭や商売に必要であり、大きくは「格致」(物理)と「化学」(科学)の要となる。これにより、新奇で巧妙な機器が生み出され、国と民衆に利益をもたらす千万のものを造り出すことができる。よって、国中の全ての人々が精になるために読書をしなければならない、と訴える。

しかし、中国の文字は世界で最も難しいと盧は嘆く。蒼頡が文字を発明して以来、四、五千年を経て、多くの書体が生まれて、煩雑になる一方で、現在四万を超える異なる文字がある⁷。実際に四書五経で常用にする文字は、四、五千字に過ぎないが、それですら、聡明な者が十数年間学習しなければならない。これでどうやって士農工商、老若男女を精にすることができるだろうかと嘆じ、最後に国中が精になれば中国は強くなると改めて強調する。

君子が頭なら、官僚は両手両足であり、民衆は体の各部である。精は血液である。君臣が精でも民衆が苟では、頭と手足が動いても、体が病に冒されているようなもので、血液がめぐらず、命令に従わない。〔中略〕血液がめぐれば、全身健康で強くなる。誠にこのようなら、中国が大きいこと、人民が多いこと、地の利に恵

まれていることから、数年で比べるものがないほど強くなるだろう。(盧1895.7:15342)

以上の盧の主張は、(1) 儒教的教養の否定をすること、(2) 老若男女、全ての民衆を国家の構成員としてみなし、国民皆教育を目指すこと、(3) 民衆の教養と中国の国力を関連付けること、(4) 教育言語として中国の文字(漢字)の学習困難性を指摘することで、当時の中国の伝統的な教育観を根底から覆すものであった。中国社会は、儒学的教養によって選抜される一部の知的エリートの質で国家の富強を決まると考えていた。洋務運動においても、儒学的教養を持つ一部の知的エリートが西洋の機械文明を学べば、中国は列強の侵略に対抗できるとの思想が支配的であった⁸。このような文脈で、下関条約の調印(1895.4)から、わずか3か月後に出されたこの論説は驚きをもって読者に迎えられた。

盧の論説には、「本館附志」として編集部の賛意を示すコメントが付けられており、それは民衆の救済を目指す宣教師の意見を代弁するものであった。

卑見では、中国人が文字を知り、読書するには、簡便な方法を求め、子どもが入塾後、四、五年のうちに文章がわかるようにすべきである。時間を作り、役に立つ諸学問を求めることができる。盧君のこの説は、我々の心を得た。(盧1895.7:15343)

3.2.2. 1895年10月「変通推原第二章」

1895年10月に掲載された第二の論説「変通推説」において、盧は「切音は漢文を助ける」との主張を掲げ、切音新字が、「俗」であり、美しく高尚な漢字に及ばないと考える知識人の通念を批判する。切音字は言葉が長く煩わしく、蟹のように横歩きし豆もやしのように美しくないとする意見に対し、盧は、漢字は簡潔に内容を伝えるものの、難しい故事成語や熟語を初学者は注解がなければ理解できないと反駁し、切音字の最大の利点は、読み書きの簡単さにあり、この簡便さが実用に結びつくと論ずる。

漢文の美しいことは万国にまれである。美しいがゆえに、その難しいこともまれである。読書をして六、七年しても、一通の手紙も書けない。もし切音字を学べば、資質が愚鈍な者でも、三年から五年もかからずに、各種の書籍を読むことができる。聡明な者は、さらに書を著し、説を立てることができる。(盧1895.10:15541)

そして、盧は、世界の中の中国という視点を導入し、「切音文字」(表音文字)が世界の趨勢であると主張する。たとえば、朝鮮や日本などの漢字文化を持つ国々でも切音文字が使われており、中国の台湾と厦門でも、すでに教会ローマ字が民衆に普及し、新聞や書籍が読まれていることを紹介する。切音字は、西洋の書籍だけでなく、中国の古籍を表記することができ、これまで儒教の教えの外にあった民衆をも教化できるもので、決して俗なものではないと結論づける。

私が住む台厦で言えば、キリスト教を奉じる男女の間で、切音字を知る者は、非常に多い。よって切音字の聖会報と台湾報が発行されている。切音字で漢文の聖賢伝と天文、地理、格物、数学など種々の要書が翻訳されている。他の十八省でも通商と宣教が行われているところで、切音字を知る者が、どれだけいるかわからないほどである。これは切音字の勢いであり、万国で通行できるだけでなく、我が国においても行うことができる。(盧 1895.10: 15541)

この論説において、盧は、漢字の利点を認めつつもその弊害を指摘し、宣教師の切音字(教会ローマ字)による言語教育を例に、民衆にとって学びやすい文字の導入を打ち出している。漢字圏の国々では、言語の近代化は文化ナショナリズムと結びつき激しい論争を巻き起こしたが、中国でも、後に民族のアイデンティティを漢字に求める者とそれを否定し漢字全廃を唱える者との間で対立が生じた(村田2005: 7-9)。その原点となる盧の言語観は、漢字の弊害を説くものの、その存在を否定するのではなく、初等教育に表音文字を使用する実用性を重視したものであった。

3.2.3. 1895年11月「三統変通推原説」

盧は、同年11月に掲載された第三の論説「変通推説」において、「日本留学、賢人を招く、切音字によって学校、新聞、図書館を振興し、強国となる」と題し、中国と日本の国力の差について検討する。国力の差とは、民衆への教育の差を意味するもので、日本は20年来三つの施策、すなわち学校制度、新聞、図書館の充実に力を入れてきた。この根本は文字、つまり、日本の四十七文字の切音文字(仮名文字)にあると断ずる。

盧は、まず、国土の広さでは三十分の一、人口では十分の一に過ぎない日本に敗れた原因を分析し、日本が明治維新から中国との戦争に備え、「変通」(改革)を行ってきたと論ずる。日本の変通の始まりは、欧州への使節団の派遣であった。そして、留学生の派遣、御雇い外国人の招聘を行い、学校、「報」(新聞と雑誌)、「書庫」(図書館)など

を通じて、西洋文明を導入してきたと分析する。

盧は、日本の戦勝の理由として学校制度を第一に挙げて詳述する。日本では全ての民衆が初等教育で言語教育を受け、学年とともに段階的内容が進み、物理、地理、歴史など教科教育に分かれることを紹介し、学校が社会階層の上昇、国家に必要な専門家の育成に重要な役割を果たしていることを解説する。続いて、第二の戦勝の理由として新聞の存在を指摘する。日本では、新聞により、日々の新しい情報が伝えられ共有されており、日清戦争中、日本では女子ですら戦況を詳しく知っていたと証言する。最後に第三の戦勝の理由として、書庫を挙げる。書籍が一部の知識人に独占されるのではなく、社会階層の上下に関わらず誰にでも読めるようにしなければならないと説き、公的な書庫の数が、国家の盛衰に関わると主張する。

盧は、これらの三大政策を支えている根本は文字にあり、日本人は漢字を用いながら、教育にかかる時間が少ないと指摘する。盧は、日本で初学者はまず切音字（仮名文字）を学び、その後「漢字の傍の注」（ルビ）を読むので、誰でも本や新聞を読むことができると力説する。

この種の切音字を習えば、わずか数日で、教師がいなくても、自分で読んで自分で音声を切りとることができる。故に、男婦老幼、文字を知らない者がいない。〔中略〕初学では、日本語と漢字が混ざった書を学ぶ。漢字の傍には、みな日本の切音字の注が付いている。初学者は漢字を知らなくても、漢字の傍の注の切音字を見れば、教師がいなくても自分で読むことができる。新聞書籍を婦人子どもでも読めるだけでなく、理解できるのは、この点による。（盧 1895.11：15610）

このように、盧は同じ漢字圏に属する日本を範とし、(1) 学校制度 (2) 新聞・雑誌 (3) 図書館 (4) 初等教育向けの表音文字、という言語教育に必要な体系的な社会システムの導入を訴える。ここでは、表音文字の導入による中国語の近代化は単独で行われるものではなく、学校と出版によって実現しうるもので、学校、新聞と図書館は、中国語の近代化によって機能するといった、系統的で近代的な言語教育思想が展開されている。

3.3. 1896年『万国公報』内外で展開された民衆への言語教育観

3.3.1. 蘇易（1896.1）「書同邑盧君切音字書後」

1895年『万国公報』に提示された民衆への言語教育観は、翌年、蘇易「書同邑盧君切音字書後」、蔡錫勇『伝音快字』、梁啓超「沈氏音書序」、沈学「盛世元音原序」と、『万

国公報』の内外で大きな反響を呼ぶ。

まず96年1月には、盧の主張に賛同する読者からの投稿が『万国公報』に掲載されている。投稿者は、鉄道の建設や鉱産を興して富国強兵を目指すことを論じる者が多いなか、民衆への学校教育と文字による富国強兵論は見たことがないと称賛する。

この「書同邑盧君切音字書後」の後にも、「公報館志」として、「同安県の盧君が著した変通推原説は七、十、十一月の公報に掲載したのち、続きが未だに寄稿されない。もし続編が来たなら、ぜひ掲載したい」（蘇1896.1：15753）との編集部からのコメントが付けられている。

3.3.2. 盧戇章（1896.2）「四読変通推原説」

1896年2月、盧の第四の論説である、「四読変通推原説」が掲載される。盧は、初めに「琉球」、「高麗」、「台湾」、「香港」など中国の領土が、日本と列強に次々と奪い取られていく情勢を危惧し、鉄路を造ったり、戦艦を購入したりすることで中国を強くすると説く者は多いが、文字と学校について説く者はいないと嘆く。「物には本と末があり、大綱がなければ小さなこと」もできず、「切音文字を創設し、文教を起こすことが、変通の根本である」と言語教育の重要性を再度確認する（盧1896.2：15811）。

続いて盧は、切音字は「あまねく天下万国の公理」であるのに、我が国には『康熙字典』の切音法があっても切音字がなく、また、欧米諸国と日本では初等教育に多額の予算をかけるのに、中国にはそれがないと説き、その結果中国の女子で文字を知る者はおらず、男子でも手紙を書ける者は、十人に一人しかいない、と慨嘆する。この現状を改めるには、『康熙字典』に加えて、『佩文韻府』や『五方元音』などの字典や韻書を参照し、各地域の「土腔」（土地の話し言葉）を表記するための簡易な文字を考案し、「中国切音新字大典」の字母として全国に頒布し、「新字義学」（新字学校）で民衆に教え、同時に「新字報館」（新字新聞社）と「新字書庫」（新字図書館）を開設すべきである、と提案する。そして、盧はすでに自身でその「中国切音新字」を完成させており、鑄造印刷で出版するための資金を同志から募りたい、と読者に懇求する。

盧はこの論説で、近代的な言語教育制度を中国に実現させるための具体的な計画を論じているが、欧米のローマ字と日本の仮名文字を切音字とみなし、その簡易さを万国の公理と評価しながらも、なお新字にこだわっている点に注目すべきである。とりわけ教会ローマ字は半世紀近く厦門と台湾で民衆に使用され、盧の言語教育観の根拠となっているにもかかわらず、盧はこれを採用せず、自らが考案した切音新字を自薦する。この論説を端緒に、この後、知識人によってさまざまな表音文字案が濫造されることとなる。

3.3.3. 蔡錫勇 (1896.8) 『伝音快字』

体系的な表音文字案である『伝音快字』は、1895年7月に『万国公報』誌上で新たな民衆への言語教育観が公開されて1年後の1896年8月に出版された。これを出版した蔡錫勇は、福建省龍溪に生まれ、広州同文館の第一期生として英語などの外国語を学んだ官吏である⁹。蔡は、1875年から陳蘭彬(1816-95)に随行して、アメリカ、日本、ペルーに赴任し、帰国後、蔡は洋務運動の中心人物である張之洞(1837-1909)に重用された。張は、1889年から湖広提督として武昌に赴任して以降、鉄道や軍備の近代化に努め、1895年ごろ、蔡は張のもとで、外国の書籍の翻訳を行いながら、張が1893年に設立した学校「自強学堂」の「総弁」を務めていた。

『伝音快字』の「自序」において、蔡はまずアメリカへの訪問を回想している。ワシントンにおいて議会や訴訟での聴衆に向けた演説を目にしたが、その際に、専門の速記者が「快字」(速記文字)で、演説内容を記録するのを知った。演説に合わせて、速記者の手が動き、毎分200文字以上を書くことができる。西洋の文字はもともと簡単だが、速記はさらに簡単だと蔡は感嘆する。蔡は続いて中国の文字に言及するが、漢字の美しさと難しさ、文字の多さ、漢字学習にかかる時間の長さを批判する。この指摘は、本稿3.2で引用した盧の「変通推原説」と酷似している。

中国の文字を学ぼうとすれば、最も美しさを備えているが、同時に煩わしく難しい。倉頡以降、文字は増え続け、字典に収録されている字は、四万余字になる。士人が一生読書しても、全てを知ることができない。〔中略〕通常使用するのは三千足らずである。四書には、異なる文字が二千四百字あり、五経十三経にはさらに二千余字が追加される。子どもが髪を束ねて入塾して、学業をその業を修めようとしても、賢い者でも十余年を経なければならない。(蔡錫勇1896.8:2-3)

蔡は口語と文語の関係に言及し、西洋のローマ字の簡便さと民衆の識字率の高さを強調するが、この言説は盧の言説と同一である。

文字と言語はそれぞれ別であり、読書をして字を知るには、その文を習い、努力して暗誦し、多くの月日をかけなければならない。西洋はローマ字を用いる。各国の読音は異なるが、みな切音を主としているので、通常と言語は、この方法を組み合わせで行う。〔中略〕文字を上から下まで、男から女まで、学ばないことは無く、

学ばない人はいない。(蔡錫勇 1896.8 : 3)

この蔡錫勇の「自序」を見ると、蔡は盧の言説から強い影響を受けていることが読み取れる。蔡は、演説という「声」と、記録としての「文」をつなぐ存在として、「快字」を知った。ところが蔡は、「快字」を速記用の文字としては使わず、教育用の文字として使用することを提唱した。この発想の転換は、盧の影響を受けたものではないだろうか。

蔡は盧の論説に言及していない。ところが『伝音快字』の巻末に収録された「伝音快字書後」では、湯金銘という人物が、盧の論説に直接言及している。湯は、蔡の「快字」を称賛した後、盧が単に論説の発表をするにとどまり、体系的な言語計画としての文字案を出版していないことを批判する。

最近、廈門の盧君が、文字を振興の根本とすると述べていることが報じられた。音をもって字を創り、身分の低い人にも習わせると考えている。論説は万言に及ぶが、その書はまだ見ていない。(蔡錫勇 1896.8 : 82)

『伝音快字』は、盧の言説に影響を受け、体系的な表音文字案を提示することで、新たな言語教育制度の主導権を握ろうとする最初の反応であった。翌月に出版された梁の『時務報』では、この「新字」の主導権を巡る論争がより明確に表れている。

3.3.4. 梁啓超 (1896.9) 「沈氏音書序」、沈学 (1896.9) 「盛世元音原序」

1896年9月、梁は、自ら主筆を務める『時務報』に「沈氏音書序」と沈学の「盛世元音原序」を掲載する。『時務報』は1896年8月に上海で創刊された雑誌で、序文が掲載された号は、創刊後間もない第四冊目である。『時務報』は、その前身が北京で『万国公報』の名称で1895年8月に発行され、続いて上海で『強学報』が1896年1月に発行されており、創刊当時から改革を目指す朝廷内外の知識人の注目を集めていた¹⁰。宣教師が発行する『万国公報』は中国の知識人の間で読者を増やしていたとはいえ、まだ一部に限られており、『時務報』が民衆への言語教育の重要性が訴えたことにより、多くの知識人がこれを共有することになった。

梁は「沈氏音書序」において、まず「国が強いかどうか、民衆に智があれば国は強い。民衆に智があるかどうか、天下の人々が文字を知り、読書をすれば、民衆に智がある」と民衆と国、読書と文字の関係を規定する。そして、「ドイツとアメリカは、百人中字を知る者が九十六、七人であり、西欧諸国は総じてそのようである。日本は百人のうち

で八十人余りである。中国は、文明をもって五州に号するが、百人のうちで字を知る者は三十人に満たない」(梁1896.9:210)と中国の識字率の低さを嘆く。

梁は「黄君」(黄遵憲)の意見を引用し、「言語と文字が離れていること」が中国の識字率の低さの原因になっており、言文不一致、文字数の多さ、字面の複雑さを改めなければならないと力説する。文は見た目が美しく、詩文を書くのには向いているが、音声による日常の生活には用いられず、長い歴史の中で言と文は離れる一方であったと指摘し、西欧も同じであったが、これを改めたと論ずる。

そして梁は、教育のために文字と言葉を一致させる動きが、自分たちの「朋輩」によって中国国内ですでに行われていることを詳細に紹介する。

私がこれまで聞き及んでいるのは、劉繼莊氏、龔自珍氏である。しかし、今に伝わっていない。わが師南海康長素先生は、子どもが初学で学ぶ音声は天下みな同じであり、十六音をとって母(音)とした。凡例を作り、その子どもたちのためにこれを編纂した。私はまだこれを見ていない。朋輩の中で、湘郷の曾君重伯(曾國藩)、錢塘の汪君穰卿(汪康年)、みな志があっても、完成しないまま時間が過ぎてしまった。『万国公報』で、厦門盧憲章が数千言にわたって自ら述べるのを見た。また、達県呉君鐵樵から、蔡毅若(蔡錫勇)の快字を見せてもらった。(梁1896.9:211)

梁は、このように自分たちの立場を明確にし、沈学の『盛世元音』の紹介に移る。沈学は西洋の文に深く通じ、5年前(1891年)にこの書を著した。「元音」は表音文字案であり、「五大洲の全ての文字」の中で優れているものであるとし、盧と蔡の文字案について「盧君の方法は古臭く劣っているものである」、「蔡君の方法は、実用に適さず方法も精密でない」と非難する。

梁の言説を見る限り、盧の「精」を「智」に置きかえただけで、国家と民衆関係、民衆へ言語教育と中国の文字に関する梁の主張は、盧と同一である。しかし、ここで梁は、盧の言語教育観や宣教師の言語教育には言及せず、自身の言語教育観の着想が、黄遵憲(1848-1905)の『日本国志』にあることを告白している。『時務報』の創刊にも関わり出資者であった黄遵憲は、初代駐日公使となった何如璋(1838-91)の参贊官(書記官)として日本に4年間滞在し、日本の国情を調査した『日本国志』を1887年に完成させ、1890年に李鴻章、張之洞らに提出した。しかし、黄と梁が知り合ったのは、『時務報』の創刊に向けて準備を始めた1896年4月であり、これ以前の1895年にすでに梁は、『万国公報』の盧の論説を読んでいたと考えられる。

梁は黄だけでなく、康有為ら『時務報』に関わる知識人の名を挙げ、民衆への言語教育との考えが中国で以前から存在していたかのように述べているが、これらの人物が1896年以前に実際に民衆への言語教育を考え、実行していたのか、梁の言説以外に史料はない。劉繼莊は清初の儒学者で音韻を研究し『新韻譜』を著した劉猷廷（1648-1695）を指し、龔自珍（1792-1841）は段玉裁（1735-1815）に連なる考証学の大家であり、いずれも民衆への言語教育には関与していない。康有為は梁の師であり、汪康年（1860-1911）は、『時務報』を発行する時務報館の総経理（社長）で、曾國藩（1811-72）は太平天国の乱を平定した同治中興（1862-1874）の功臣であり、やはり民衆への言語教育を実施していた痕跡はない。梁は、社会的文脈の全く異なる人物を結びつけ、民衆への言語教育が、自身が属する変法派から始まったかのような印象を読者に与えようとする。

梁の目的は、盧、蔡に比べて後発だった沈学を推薦することであったが、その言説は、宣教師からの影響をかき消し、史実を改変するものであった。この梁の態度は、梁と『万国公報』との複雑な関係に由来する。

3.3.5. 梁啓超と『万国公報』

1896年は、『時務報』を中心として、1860年代から近代化を推進してきた洋務派と、康、梁らの新興の変法派らが糾合し、改革の方向性についての具体的な討議が始まった年だった。『時務報』はこの後、孫文（1866-1925）らの「興中会」（1894年設立）と接近するなど、内外の改革派にも影響を与えるようになる。変法派のジャーナリズムは、マカオの『知新報』（1897年創刊）や長沙の『湘報』（1898年創刊）など、中国全土の知識人に影響を与え、中国を近代社会へと変革するための思想的基盤を創りだした。

このように『時務報』は中国の近代化に大きな影響を与えたが、その創成期には、宣教師が発行する『万国公報』と同じ名称を使っていた。若杉（1996、1998）はここに注目して、この新聞が上海の『万国公報』の編集部から許可を求めることなく、変法派が無断に記事を転載・発行したことを明らかにした¹¹。

当時『万国公報』を出版していた広学会の宣教師Timothy Richard（1845-1919）はこの間の事情について、その日記*Forty-Five Years in China*で詳しく記録している。Richardは当時、広学会の出版物の海賊版が広く出回っていることに言及した後、次のように回想している。

北京では、1895年から1896年にかけての冬、戊戌変法の最初の数か月に、改革

クラブが新聞を発行し始めた。Allen博士の『万国公報』上で発表した文章を印刷しただけでなく、新聞の名前も同じだった。(Richard 1916 : 234)

改革クラブとは、康、梁らが組織した強学会を指す。Richardは『万国公報』が転載(reprint)されていた事実を次のように説明する。

当初、彼らの新聞の内容は全て私たちの刊行物から転載したものだ。唯一異なったのは、我々の新聞が上海で金属の活字で印刷したのに対し、彼らは政府の『京報』が採用する木版を採用したことだった。このことにより、表面上は、政府機関報と同じになった。しかし、内容は、広学会の宣伝する西洋の思想を紹介していたのである。(Richard 1916 : 254-255)

Richardは1895年10月に初めて康有為と北京で会見する。無許可の転載とはいえ、『万国公報』が朝廷の官僚たちに読まれることは望ましいことで、変法派の新聞を認めることにより、朝廷内に影響力をふるうことができるとRichardは考えた。そしてRichardは、『中外紀聞』へと改称された新聞の顧問となる。梁らにとって、Richardという顧問は得難い存在だった(若杉1998:146)。この事情を見る限り、梁が1895年上海の『万国公報』の記事をくまなく閲覧していたことが容易に推測される。梁が『万国公報』を出典元としておきながら、自らの言説があたかもオリジナルであるかのように装ったことをもう一度ふり返りたい。梁は、その後も上海広学会との関係を対外的には公言していない。梁は、日清戦争の敗戦を契機に改革を求める知識人が増え始める中で、康有為を首領とする変法派の影響力の拡大を狙っていた。梁が変法派の地位を固めようとしていた傍証は「公車上書」に認められる。

「公車上書」とは1895年5月、康有為が、日清戦争の講和に反対する会試の受験生である挙人ら1200人余りの連署を集め、上書を都察院に差し出した事件を指す。この「上清帝第二書」と呼ばれる意見書は、「変通」によって朝廷を改革すべきだと訴え、「西洋の富強の理由を考察すると、大砲や機械などの武器ではなく、理をきわめ学問を勧めることにある。西洋では七、八歳からみな学校に入学し、入学しない者は両親が責任を追究される。よって郷塾が甚だ多く、各国の読書できる識字者は、百人中七十人になる」(康有為1895 : 148)と民衆への言語教育の重要性を訴える。この「公車上書」は康有為の先駆性を示す事件として当時広く宣伝されたが、現在では、この事件の存在そのものが否定されている¹²。

3.3.6. 盧戇章 (1896.10) 「中国切音新字説」

1896年10月、再び盧の論説は『万国公報』に掲載された。その文章は短く、現在、内外で注目されている「切音新字」とは、盧が早期から取り組んできたものであると伝えられている。

盧は、「中西同志諸君」からの手紙が続々と寄せられていることを紹介し、26歳から43歳の今に至るまで昼夜を問わず苦労して切音新字を創作してきた経験から、切音新字が最も古くからの新字であることを強調する。そして、すでに福建音の切音書を2000部販売しており、近日中に北京音の切音を完成し中西同志諸君に報告すると伝えている。

ここでも民衆への言語教育のための新字が論点となり、自身の考案した切音新字の優位性が強調されている。

3.4. 1897年「新字」の主導権を巡る争い

1896年、民衆への言語教育観は、『万国公報』上だけでなく、蔡の『伝音快字』や梁の『時務報』にも波及し、全国の知識人の関心を集めるようになった。盧の主張は、当初新字の導入から総合的な近代教育制度の構築を目指すものであったが、議論が広がるにつれて、誰がどのような新字を作成し、改革を主導するのかへと論点が移っていく。1897年、『万国公報』誌上には、林韜存「書盧戇章先生中国切音新字後」、沈学「節録致盧戇章先生第三函」、蔡爾康「書伝音快字後」、怡園小主人「致沈学先生函」が掲載された。

1897年1月に掲載された林韜存(1879-1919)の「書盧戇章先生中国切音新字後」において、盧を支持する林は、盧が考案した「中国切音新字」は、六十余文字で中国各省の方言を表記することできるため、ローマ字表記より優れており、簡便であると主張する。盧の著作『一目了然初階』に掲載された「中国第一快切音新字」では、すでに廈門方言を表記する三十六文字に加えて、泉州と漳州の方言を表わすための十文字を加えた四十六文字が使用されており、現在北京官話を表わすための文字が作成中であると報じられている。

これに対し、同年3月に掲載された沈学の「節録致盧戇章先生第三函」で、沈は、盧への競争心を露わにする。沈は、自らの考案した「元音」は十八画で五大洲の方言を表わすことができるもので、もしこれより優れた方法があれば、洋銀三千元支払うと強硬に主張する。沈は意見をたずねるために、盧に手紙を二通出したにもかかわらず返事がないので、『万国公報』にこの三通目の手紙を送った、と記している。沈は、「格致音律」

(近代的な音韻学)と「古今字法」(古代と現代の表音法)に通じた者がいないことを嘆き、盧の論説ばかりが注目を集めていることに不満をもらし、自身の「元音」が、音韻学的にいかに優れているかを力説している。

その後4月には、蔡爾康の「書伝音快字後」が掲載される。蔡はこの時『万国公報』編集部の中国語の主筆であった。蔡は、「西洋は声を文字にする」という、民衆への言語教育の基本姿勢を展開し、盧、沈と蔡を比較し、同郷で同姓の蔡錫勇の書を推薦する。

さらに5月には、「怡園小主人」という人物による、沈の手紙に向けた「致沈学先生函」が掲載される¹³。わずか3行からなる書簡は、盧の「切音新字」が最も早くから行われてきたことを述べるもので、もしこれより早く書かれた資料があれば申し出るように求めている。

これを最後に、『万国公報』上での新字を巡る論争は終了する。さまざまな改革論者は、中国の富強を目指すための民衆への言語教育という新たな思想を共有したはずであったが、自らの支持する新字を巡っての協力や譲歩はなく、結局のところ社会に受け入れられる新字を生み出すに到らなかった。

3.5. 1898年「切音新字」の上奏と変法運動の挫折

1898年6月、光緒帝(1875-1908)は「明定国是」の詔書を下し、変法が始まる。改革を求める数々の上奏が行われるなか、盧の「切音新字」も林韜存を通じて上奏され、皇帝からの調査を指示する上諭が下る¹⁴。しかし、わずか3か月後に変法は失敗し、梁は日本大使館の助けを受けて、後に表音文字案「官話字母」を考案することとなる王照(1859-1933)とともに日本へ亡命する。黄遵憲は官職を解かれ、汪康年も清朝から追捕される。盧、沈らはそれぞれ廈門と上海で逼塞し、蔡は1897年に病没する。

変法運動の挫折により、民衆への言語教育を訴える議論はいったん終息する。しかし、この議論によって、中国の近代化のためには、民衆が教育を受けなくてはならず、教育を実施するためには、まず中国の文字を改めなくてはならない、という言語教育観が知識人の間で広く共有されていった。

4. 結論

本稿は、『万国公報』を中心として、1895年から1898年に至る言語教育に関する言説の変遷を歴史的に検証し、中国の知識人の間に広まり共有されるに至る過程を解明した。民衆への言語教育は宣教師の言語教育に影響を受け、1895年『万国公報』に掲載され

た盧の三つの論説から始まり、1896年の『伝音快字』など『万国公報』の内外で論争が発生した。梁啓超がこれに加わることにより、民衆への言語教育の重要性は、改革派の知識人の中で広く共有されることになった。

この論争を通じて、国家と民衆、民衆と言語、言語と言語教育という、中国語の近代化から中国の近代化へと至る論理が知識人の中で形成されていった。中国語による近代化を阻害する要因には、(1) 言文の不一致 (2) 漢字の字画の複雑さと文字数の多さ (3) 言語学習にかかる時間の長さが挙げられ、これを変革する必要性が訴えられた。

この時期に、中国の知識人が、中国語の近代化を学校教育など近代的教育制度から切り離し、伝統的な「言」と「文」の対立で認識したことは、その後の流れを規定した。盧は、当初、近代的な言語教育制度を紹介し、そのために新字の必要性を訴えたにもかかわらず、漢字に代わる新たな文字規範として字そのものへ強い関心が向けられると、積極的に新字の主導権を巡る論争に加わった。1897年の議論は、『万国公報』上で、盧、蔡、沈が新字の優劣を競ったが、協力して民衆への言語教育を実現するとの建設的な議論には向かわなかった。

この間の事情は、宣教師の間で会派を超えた情報交換が行われ、早期にローマ字による表記に定まった事情とは大きく異なる。宣教師の間でも、表記文字を巡る議論が生じたが、宣教師は音声を重視し、学校教育における教育言語の整備を目指したことから、表記文字を技術的な問題に過ぎないと考えた。

中国の知識人による新字を巡る議論は、1900年以降も再び活発化し、1912年の清朝崩壊までに32種類の文字案が考案され、中華民国期にも、注音字母、国語ローマ字とラテン化新文字を巡る争いが生じた。この文字を巡る議論の長期化が、中国語の近代化を遅らせ、中国語による近代化を遅らせる一因となった。

今後の課題として、本稿の前史となるTalmageらの宣教師による民衆への言語教育を検討する必要があるだろう。宣教師は来華以前、中国の民衆を読書のできる啓蒙された存在とみなしていたが、その後見解を改め、民衆への言語教育を試みる。従来の研究では、この教会ローマ字を用いた言語教育の実態はほとんど解明されていない。また、清末の議論を歴史的に整理した1920年代から30年代の国語運動における史観についても、今後、さらなる考察を待たねばならない。そこでは、言語ナショナリズムの強化を目指す黎錦熙(1890-1978)の『国語運動史綱』(1934)の研究によって、中国人自身による国語の発展が強調され、宣教師の影響は過小に評価された。言語の近代化と国家の近代化には依然として解明すべき課題が多い。

注

- 1 本稿では、中国の經典を背景にもつ書き言葉を「文」、又は「文語」と呼び、これに対する「言」を「口語」と呼ぶ。単に話されたり、書かれた言葉を意味する場合は「話し言葉」と「書き言葉」と呼ぶ。文語は、漢字を表記文字とし、漢文で綴られ、音声（正音）、語彙と文体から口語をも規定していた。よって、文を綴ることのできる知識人の言語とその能力を持たない庶民の言語は異なっていた。「方言」は、小学（音韻学）の研究対象であり、文語の言語変種を指していた。宣教師には、Macgowan（1883）のように庶民の話し言葉を方言（dialect）として認識し研究する者がいる一方、Douglas（1873）のように方言や口語（colloquial）の概念は自然な言語状態にそぐわないとし、文語とは別の俗語（vernacular）や話し言葉（spoken language）として研究する者もいた。
- 2 字典や韻書では、切音や反切と呼ばれる方法で、漢字の読み方を示した。ある漢字の音を別の漢字で表わす方法で、日本語で例示すれば、「東は、徳と紅の切」の場合、徳（トク）のトと紅（コウ）のウを組み合わせて、東（トウ）の読み方を表記できる（大島2011：73）。
- 3 魯迅『朝花夕拾』、胡適『四十自述』などの自伝には、漢字と文の暗記学習が単調で辛かったことが述べられている。
- 4 本稿では、カトリック宣教師には言及せずプロテスタント宣教師のみを研究対象とする。16世紀に来華したMatteo Ricci（1552-1610）らカトリック宣教師の中国語研究はよく知られているが、カトリック宣教師は漢字での布教に違和感を持たなかったため、民衆への言語教育に関心を持たなかった（蒲2009：4、ラマール2005：175）。
- 5 本稿では、北京で梁啓超らが発行した『万国公報』や公車上書における「上清帝第二書」から、この問題を探究する。
- 6 『万国公報』上の議論は、倪海曙が1950年代に文字改革研究の基礎史料を整理し、出版した際に入れられていない。1968年に出版された影印本も台湾で出版されたため、近年まで中国大陸の研究者にその内容を知られずにいた。許（2000）も、『万国公報』上の盧の主張の内容には言及していない。
- 7 蒼頡は黄帝に仕え、漢字を発明したとされる伝説上の人物。
- 8 近代的な海軍建設のため1966年から設立された福州船政局には、近代的な造船と操船技術を学ぶための福州船政学堂が併設されたが、水兵向けの学校は設置されな

かった。船政学堂の入学試験の問題は「大孝は終身父母を慕う」について論ぜよ、であった。

- 9 広州同文館は、洋務運動の際に1863年に設立された外国語教育機関である。
- 10 梁らが北京で発行した『万国公報』は、上海の宣教師が発行していた『万国公報』とは同名の異なる雑誌である。その経緯については、本稿3.3.5で詳述する。
- 11 島田虔次らによる『梁啓超年譜長編』の日本語版も若杉の研究を踏襲している。
- 12 茅海建(2005a)によれば、「上書」には当事者が知りえない情報が書かれているうえ、事件を第三者が見聞した記録が存在していない。また、欧陽躍峰(2002)は、1900年前後、さまざまな派閥に分かれようとしていた改革運動において、康が指導的に地位にあったことを明確にするために、記録の操作が行われたと分析する。
- 13 黄(2005:83)は、「怡園小主人」を林略存だとする。
- 14 『光緒実録』光緒二十四年(1898)七月戊寅の条。

文献

- 大島正二(2011)『中国語の歴史 ことばの変遷・探究の歩み』大修館書店
- 大原信一(1994)『近代中国のことばと文字』東方書店
- 蒲豊彦(2004)「清末宣教師の文字改革と標準表記システム」『第四回文字文化圏近代語研究会予稿集』155-156
- 蒲豊彦(2009)「庶民のための書き言葉を求めて—清末から民国へ」森時彦編『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所3-26
- 丁文江、趙豊田編、島田虔次編訳(2004)『梁啓超年譜長編』岩波書店
- 藤井(宮西)久美子(2003)『近現代中国における言語政策』三元社
- 松岡榮志(2010)『漢字・七つの物語：中国の文字改革100年』三省堂
- 村田雄二郎、C.ラマール編(2005)『漢字圏の近代：ことばと国家』東京大学出版会
- 若杉邦子(1996)「資料紹介：『(北京)万国公報』-清末維新派が発行した最初の雑誌」『中国文学論集』(25)141-149
- 若杉邦子(1998)「戊戌変法運動の草創期における維新派と広学会-維新派が発行した《(北京)万国公報》を中心に」『東方学』(96)133-148
- 陳以平(2008)『閩南話羅馬字課本』内部発行
- 黄温良(2005)『晚清的漢字拼音化運動』(修士論文、2012年1月20日参照、『台湾博碩

- 士論文知識加值系統』<http://handle.ncl.edu.tw/11296/ndltd/34220835000069131562>)
- 黃遵憲 (1898) 『日本國志』 浙江書局
- 敬鄉樓叢書 (1928) 『六齋卑議』
- 黎錦熙 (1931) 「三十五來之國語運動」 『最近三十五年之中國教育』 商務印書館
- 黎錦熙 (1934) 『國語運動史綱』 商務印書館、2011年再版、商務印書館
- 李宇明 (2003) 「清末文字改革家論語言統一」 『語言教學與研究』 2003 (2) 1-11
- 李宇明 (2005) 「切音字的內涵與外延」 『福建師範大學學報 (哲學社會科學版)』 2005 (3) 96-102
- 茅海建 (2005a) 「「公車上書」考証補 (一)」 『近代史研究』 2005 (3) 8-50
- 茅海建 (2005b) 「「公車上書」考証補 (二)」 『近代史研究』 2005 (4) 93-155
- 倪海曙 (1959) 『清末漢語拼音運動編年史』 上海人民出版社
- 歐陽躍峰 (2002) 「「公車上書」：康梁編造的歷史神話」 『歷史教學』 2002 (10) 61-63
- 拼音文字資料叢書 (1956) 『佻音快字』 文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書 (1956) 『拼音字譜』 文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書 (1956) 『閩腔快字』 文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書 (1956) 『盛世元音』 文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書 (1956) 『一目了然初階』 文字改革出版社
- 清末民初報刊叢編 (1968) 『萬國公報』 華文書局
- 時世平 (2013) 『救亡·啓蒙·復興—現代性焦慮與清末文字救國論』 『南開大學學報 (哲學社會科學版)』 2013 (1) 85-94
- 王東杰 (2009) 「從文字變起：中西學戰中的清季切音字運動」 『中山大學學報 (社會科學版)』 2009 (1) 49、83-94
- 王爾敏 (1982) 「中國近代知識普及化自覺及國語運動」、王爾敏 (2002) 『近代文化生態及其變遷』 百花洲文藝出版社 291-338
- 吳稚暉 (1931) 「三十五來之音符運動」 『最近三十五年之中國教育』 商務印書館
- 許長安 (2000) 『語文現代化先驅 盧戇章』 廈門大學出版社
- 鄭師渠 (2001) 「『萬國公報』與中日甲午戰爭」 『近代史研究』 2001 (4) 173-201
- 中國近代期刊彙刊 (1991) 『強學報·時務報』 中華書局
- 中國近代史資料叢刊 (2000) 『戊戌變法』 上海人民出版社
- 周有光 (1961) 『漢字改革概論』 文字改革出版社
- Douglas, Carstairs (1873), *Chinese-English dictionary of the vernacular or spoken language*

- of Amoy: with the principal variations of the Chang-Chew and Chin-Chew dialects*,
Trübner
- De Francis, John (1950), *Nationalism and Language Reform In China*, Princeton University Press.
- De Jong, Gerald Francis (1992), *The Reformed Church in China 1842-1951*, Wm. B. Eerdmans Publishing
- Fagg, John Gerardus (1894), *Forty Years in South China: A Biography of the Rev. John Van Nest Talmage*, Board of Publication of the Reformed Church in America
- Macgowan, John (1883), *English and Chinese Dictionary of The Amoy Dialect*, A. A. Marcal
- Richard, Timothy (1916), *Forty-Five Years in China*, T. Fisher Unwin Ltd
- Talmage, John Van Nest (1863), *History and Ecclesiastical Relations of the Churches of the Presbyterial Order at Amoy, China*, Hallenbeck & Thomas, Printers

在19世纪末期的中国的语言教育观的变化 :以《万国公报》上的卢懋章的论说文和给予梁启超的影响为中心

赤桐 敦

关键词 : 语言教育政策史, 切音字, 万国公报, 卢懋章, 梁启超

摘要 : 在19世纪末期, 中国的知识分子们开始发表要求改革汉语的言论, 出现了许多叫做“新字”或“切音字”的表音文字的方案。本稿详细调查了基督教传教士发行的中文杂志《万国公报》上1895年登载的卢懋章的论说文“变通推原说”与从1895到1898年之间所发表的关于语言教育的文献史料后, 发现卢懋章提出的新的语言教育观给予了梁启超等的变法派的知识分子们巨大的影响。在他们开展的变法运动过程当中模仿了卢懋章的言论, 使得中国各地的知识分子们了解到了现代性语言教育观。卢懋章在厦门看到基督教传教士利用“教会罗马字”拼写老百姓的口语, 进行语言教育。想用语言教育的现代化来教育老百姓, 从而实现中国的富国强兵。不过, 对于传教士来说, 这文字仅仅是工具, 但对于中国知识分子们来说确是很重要的文化象征。之后关于“新字”出现了严重的意见分歧。因此, 到了清末产生出了32种表音文字方案, 之后也一直持续着如何统一性文字的争论, 使得现代语言政策的实施被推迟了。

(京都大学大学院 人間・環境学研究所 博士後期課程)